

ロベルト・ボラーニョ著・野谷文昭訳 『アメリカ大陸のナチ文学』

白水社、二〇一五年

甲斐 清高



本書は文学事典という体裁になっているが、そこで紹介される作家・詩人たちは実在せず、彼らを書いたとされる作品も架空のものである。事典という形式にふさわしく、それぞれの人物の人生や文学活動は淡々と語られていく。各項目を飾る人物たちは、「ナチ文学」という括りがあるにもかかわらず、ナチズムとの関わりは各人各様であり、ほとんど関係ないと思わせるような人物もいる。みな作家や詩人であるという共通点はあるが、その他の面で見ると、上流階級の女性、フリーガン、刑務所内のギャング、暗殺集団のメンバー、小学校の教員などさまざまな顔を持つており、その個性もバラバラだ。それぞれの人物たちが残した作品にしても、詩、戯曲、小説、哲学書など様々であり、小説でいうと、冒険小説、ミステリー、恋愛小説、官能小説、SFなどジャンルも多岐にわたる。これらの作品の内容や意義が、人物の紹介と同様に淡々とした文体で説明され、直接引用されることはほとんどないが、そのジャンルに対応した文学作品のタイトルを見ただけでもボラーニョの文学的視野の広さが窺える。「モンスタールたちのためのエピソード」に掲載されている架空の書籍タイトルのリストは圧巻だ。

それぞれの作家・詩人たちはみな特異な個性を持っているのだが、それにもかかわらず、どこか似たような印象を与える。ひとつには、文学事典らしい淡々とした語り口によって紹介されているからだろう。もうひとつ、すべての主人公たちが一様に、書くという行為に対する執念のようなものを持つ

ているからではないだろうか。飛行機に乗って空中に詩を書いたり、複数の詩人からの剽窃を切り貼りしたり、といった活動を見ていると、何を書くか、よりも、書くという行為そのもののへの強烈な衝動が先に立っているように思えてしまう。各人各様の人生の中で、どの人物にとっても、生きることと書くことは分かちがたく結びついている。キューバのナチ作家、エルネスト・ペレス・マソンは言う。「自分にただひとつできることをして、すなわち、物を書いて暮らしたい」。

結局のところ、種々雑多な物書きのモンスタールたちはみな作者ボラーニョの分身であり、さまざまなジャンルを横断する彼の創作欲を満たしているのではないだろうか。剽窃詩人マックス・ミルバレーは、他の詩人たちと際立って異なりながら、この架空文学事典全体を表す特徴を持つている。彼は、新聞の社交欄の編集者でありながら、さまざまな異名を持つ詩人であり、また別の名前で作曲家／歌手となる。実際、マックス・ミルバレーが本名なのかどうかも定かではない。本書に登場する人物たちが、それぞれ名前や姿が違っても、すべてボラーニョ自身の分身であるのを思わせるのと同じように、分身のひとりであるミルバレーも複数の名前と姿を持つのである。

最終章「忌まわしきラミレス・ホフマン」では、それまでの人物紹介とは打って変わって短編小説のような物語を展開し、さらにはボラーニョ本人を一人称の語り手として物語の中に登場させることによって、作者は文学事典という形式を完全に裏切り、ジャンルの越境をはかる。そして、ラミレス・ホフマンもまたさまざまな名前を使い、詩人、殺人者、バイロット、元守衛など、さまざまな顔を持つ。彼の芸術活動を辿りながら、語り手はこの詩人に近づいていく。ここで語り手ボラーニョによる「読む」という行為が作品の中に入り込んでくるわけだが、物語の主人公はあくまでもラミレス・ホフマンであり、彼の芸術活動にとって、読まれることは必ずしも重要ではない。彼が飛行機で書く詩を判読できる者は少なく、空中の詩はすぐに消えてしまう。そこにあるのは、書くこと、表現することへの渴望である。この殺人詩人からさえも、作者ボラーニョ自身の持つ書く行為への強い執着が感じ取れるのだ。